なるべく最近詠まれた職業・労働の歌を探すに当たり、始めは「心の花」近号のページをめくっていたのだが、これがとても難しいことであるのに気づいた。なぜなら、私がその職業まで知っている会員はほんの一握りに過ぎず、また、いい歌は職業を離れられた人生のベテランや職業を持たない女性の方に偏っていたからである。そこで、やむなく、昨年末の角川「短歌年鑑」の自選五首を中心に選び、何首かを「歌壇」本年三月号の「アンソロジー二〇一一」から加えた。その代わりと言うわけでもないが、ちょっと変わった視点からの歌を多く選んだつもりである。

わたくしがどこにもいない教室にチョークの音のみかたかた響く　有沢螢

作者の年齢からすると、教員だった方が退職後に詠まれている歌だろうか。誰もいない教室に、授業をしている隣の教室から板書するチョークの音が聞こえてくる。「かたかた」というオノマトペにリアリティがある。

限りなき患者の愁訴聞いており忍の字にある刃を思いつつ　久山倫代

お医者さんの歌のようだが、ちょっと怖いところもある。しかしながら、医者だって神様ではないのだから、この歌は本音に近い部分が詠まれているとも言えるだろう。

ファックスの十ほど入り放牧のヤギを集めるごとく並べる　中川佐和子

短歌の現在

職業・労働の歌15首を読む

黒岩剛仁

これは職業の歌かどうか分からないが、ある種の労働を詠んではいる。ファクシミリで届いた文書を並べて見ているわけだから、それぞれが別々の文書であることが想像される。「放牧のヤギを集めるごとく」との比喩からは、あまり楽しそうな感じは伝わってこない。

外つ国の家族四人の一年を食わせうる額　請求書かく　永田淳

なぜ「外つ国の」と限定したのだろう。円高の今なら、ということか。作者が幼い頃、父君の留学に従い、一家四人でアメリカに住んだことも関係があるのかも知れないが、それはあまりに迎えた読み方過ぎるだろうか。

芝庭の落葉を掻きてゆく熊手痒いところに爪立てながら　浜名理香

この歌は、例えば寺の住職が落葉を掃いているところを見て詠んだものとも取れるが、下句の細やかな感覚から判断すると、やはり作者自身が校庭などを掃除しているのだと思う。「熊手」と「爪立てながら」とが利いている。

書けばよし老いたる思ひを書けばよしかく思ひつつ机に一人　武川忠一

先頃亡くなった作者の老境の歌なので、これを職業・労働の歌としてよいのかどうか、とも考えないわけではないが、ここに込められている使命感には頭の下がる思いがするのである。

なきがらを捜索する人、搬ぶ人、検死する人、記録